

天台山の詩歌（其三） 〽六朝以前（下）

* 薄 井 俊 二

キーワード：天台山、天台集、漢詩、仏教文学、道教文学

はじめに

本稿は、天台山に関わる詩歌について検討を加えることを通して、当時の人々の天台山に対するイメージとその変遷を考察しようとするものである。宋代の李庚等の「天台前集」（「前集」と略）と近人の許尚枢『天台山詩聯選注』（「許本」と略）に掲載されているものを中心に選択していくが、今回は、六朝時代の賦を二点取り上げ、最後に六朝時代を通しての天台山をめぐる詩歌全体について考察を加えることとする。¹⁾

●凡例

- ・丸数字で、「天台前集」でのタイトルを掲げる。
- ・☆で「前集」や「許本」での収録状況を、★でその他の資料における収録状況を述べる。
- ・以下、■本文と訓訳、■校勘、■語注、■口語訳、■解説、の順で記述するが、⑰と⑱についてはそれぞれの独自の方法をとった。各部分の冒頭の注記*参照。
- ・本節で参照した文献の内、総括的なものとその略称は次の通り。

梁沈約『宋書』…中華書局本

梁昭明太子『文選』…李善注本

唐欧阳詢等奉勅撰『藝文類聚』一〇〇卷（類徒）

清嚴可均『全上古三代秦漢三國六朝文』七四一卷

顧紹柏校注『謝靈運集校注』（校注）

四 天台山の詩（其三） ～六朝以前（下）

⑰天台山賦並序 孫綽

☆前集卷上、許本卷一

★文選卷十一、類徒卷七（序のみ）、全晋文卷六十一

「題名」

前集は「天台山賦」とするが、文選・類徒等は「遊天台山賦」とする。

*この賦については、後述するように既に日本語への訳注が幾種類も作られていることから、全体の訳注は省略して、■解説のみとし、その中で本文や訳注を随時挿入していくこととする。

■解説

1. 日本における近年の研究と本稿の立場

日本語での訳注と近年の研究論文としては次のものがある。

訳注では、「遊天台山賦」が収録されている『文選』の訳注として、小尾郊一による『全釈漢文大成』（集英社、一九七四）、及び高橋忠彦による『新釈漢文大系』（明治書院、一九九四）がある。他に長谷川滋成が『孫綽の研究』（汲古書院、二〇〇二）の「老莊・神仙・仏教がある「天台山に遊ぶ賦」」において、この賦において使用されている、老莊に関する語・神仙に関する語・仏教に関する語を検討され、「老莊・神仙・仏教の三つを一つに統合して、人間の永遠なる生命を追求した作品である」と結論づけられている。長谷川はまた

「孫綽」「天台山に遊ぶ賦並びに序」『東晋の詩文』（溪水社、二〇〇二）において、この賦と序文について詳細な注解を施されている。

近年の専論としては、石川忠久「孫綽「遊天台山賦」について」

（『二松学舎大学大学院紀要 二松』第五集、一九九二）がある他、

遠藤祐介「孫綽撰「遊天台山賦」と般若経世界」（『智山学報』第五

二輯、二〇〇三）、佐竹保子「孫綽「天台山に遊ぶ賦」の修辭——『楚

辭』から謝靈運詩賦に至る」（『集刊東洋学』第九三号、二〇〇五）、

同「天台山に遊ぶ賦」序文の検討——存思法」との関わり」（『東北

大学中国語学文学論集』第一〇号、二〇〇五）、同「孫綽「天台山に

遊ぶ賦」の描く理想郷——先秦から劉宋に至る理想郷描写における位

相」（『立命館文学』第五九八、二〇〇七）がある。遠藤は孫綽と

仏教、とりわけ般若思想との関わりに注目して賦本文に検討を加え

ている。その結果、『遊天台山賦』では天台山が靈鷲山に擬せられ

て、山上では釈尊の説法が行われている様子を象徴的に描き、登山

の経路は五道になぞらえられて、登山の方法は数息観の修行で煩惱

を除くことがイメージされていた」とされている。一方佐竹は、遠

藤と同様、天台山への遊行は現実の登山ではなく、理想郷へ至る観

念的な思想的営みであるとする。しかし遠藤が仏教との関わりから

検討しているのは異なり、もっぱら道教との関わりを見ている。

即ち、「その「険しい登攀」が、……宗教的な修行法の一つである

「存思」法に延源している可能性を推測」され、また「主人公が辿

り着く山頂の別天地」は神仙思想・道教的な仙境を描いているとさ

れる。

遠藤と佐竹とは、前者が仏教的、後者が道教的との違いはあるが、天台山への遊行が思想的宗教的な営みと関わりのあること、天台山、

とりわけその山頂が宗教的な別天地や理想郷とされていることにおいては共通している。いわば「遊天台山賦」を思想的・宗教史的な流れの上で解釈しているのであって、そこに書かれている情報や事象については、それが歴史的地理的にどう確認されるかについてはあまり問題にはしていないと言える。

さて本稿は両者の立場や方法を否定するものではないが、あえて、この賦を地理的な記事の現実性にこだわって検討してみたい。作者である孫綽が天台山についてどういう知識や認識を抱いていたのかについて、地理知識の点から確認してみたいからである。

2. 孫綽について

孫綽（三一〇？～三六七？）²は、山西太原の人。字は興公。孫楚の孫。東晋王朝に仕え、著作佐郎を手始めに永嘉太守など諸官を歴任し、最後は牢獄管理の長官である廷尉卿で終わった。蘭亭の会にも参加するなど文名は高く玄言詩の作者として知られる。「集解論語」十卷、「至人高士伝讚」二卷、「劉向列仙伝讚」三卷、「晋衛尉卿孫綽集」十五卷があったらしい（『隋書』経籍志）が伝わらない。本賦の他、「蘭亭集後序」「喻道論」「贈謝安詩」などが残る。『晋書』卷五六孫楚伝本伝。

3. 「遊天台山賦並序」の概要

「遊天台山賦並序」は、『文選』の遊覧の賦に所収。天台山への遊覧を歌ったものだが、実際に天台山を訪れてのものではなく、山を描いた図を眺めて作ったものだという。

序においては、天台山は優れた名山だが、五岳に列せられず典籍

にもその名が見えないのは、「所立冥奥、其路幽迴（その位置するところが奥深く、そこへ至る道が微かで遠い）」からだとする。そしてそこへ至るには「始經魍魅之塗、卒踐無人之境（始めは妖怪や山の神のいる道を経由し、最後には何者も存在しない世界を進んでいかなければならない）」のである。しかし「遠寄冥搜、篤信通神（遠く離れたものに思いを寄せ、熱心に神を信ずるもの）」であれば、「俛仰之間、若已再升者也（しばらくの間に二度も天台山に登った気持ちになる）」のである。

賦の本体は、五つの部分に分けて捉える見方が多い。

第一部は冒頭の「太虚」の句以下の二十二句で、佐竹は「天台山の位置と概観」と小題を付ける⁴。天台山は、「結根彌於華岱、直指高於九疑（その基層部は華山・泰山といった五岳よりも高く、真っ直ぐ伸びては九疑山よりも高い）」である。そうした名山に飛翔することを宣言し、その契機となるものとして「二奇（ふたつの奇景）」があるとして「赤城霞起而建標、瀑布飛流以界道（赤城山は霞のように聳えて標識をなし、瀑布は飛び流れて境界を示している）」とし、赤城山と瀑布を天台山を代表する形象としている。

第二部は「諸靈験」の句以下の二十四句で、佐竹は「険しい登攀」と小題をつける⁵。台嶺（天台山）に登ることができれば崑崙山を羨む必要がないと述べ、次いで具体的に登攀の様子を描いていく。

①「被毛褐之森森、振金策之鈴（ふさふさした毛皮の衣をまとい、りんりんと錫杖の鈴を鳴らして進む）」

②「披荒榛之蒙籠、陟峭嶠之崢嶸（密生した雑木林を拓き、険しい断崖を登っていく）」

③「濟楡溪而直進、落五界而迅征（楡溪を渡って真っ直ぐ進み、五

つの県の境界を斜めに下って速度を上げる）」

④「跨穹隆之懸磴、臨萬丈之絶冥（弓なりの石橋を渡り、万丈の深い谷に臨む）」

⑤「踐莓苔之滑石、搏壁立之翠屏（苔の着いた滑りやすい石を踏み、壁のようにそそり立つ岸壁にしがみつく）」

⑥「攬樛木之長蘿、援葛藟之飛莖（もつれるように曲がった木に絡まる葛藟の手に取り、葛から伸びた枝を引っ張る）」

佐竹はこの部分は「主人公が山に登り行く過程を、順次細やかに追う記述となって」おり「山に登りつつある」過程の連続性を示す」叙述となっているとする。そうした文学的な指摘を踏まえつつ、改めてこの記事を地理情報の点に注目して捉えてみる。

②は山の入り口。天台山の麓は「密生した雑木林」が被っているので先ずそこをかき分けて山に入る。更に「険しい断崖」があつてそこをよじ登る。③は山の麓から裾あたりを進む様で、楡溪という谷川⁶を渡り、五県の界を進む。「楡溪」は天台山にあるとされている溪流の名で、「五県の界」という言葉も天台山を記述する際に頻出の語である⁷。④は山中にある石橋の描写で、⑤はそれを渡ることを述べる。天台山の石橋といえば、山の北の奥にある、いわゆる石梁飛瀑が有名であり、おそらくこれを指しているよう。ここを渡ることは天台山の「真」の山中に入ることや、天台山の「主」となることを示している⁸。

第三部は「既克」の句以下の十四句で、佐竹は「高台での休息と心身の浄化」と小題をつける⁹。「九折（つづら折りの道）」を登りおえると、さらに「威夷（なだらかな道）」が続く。途中には心身を休める「緘草（草の生えた場所）」や「長松（長い松林の中の道）」が

ある。鸞鳥の姿を見かけ、鳳凰の鳴く声を聞きながら進み、「靈溪」¹⁰で沐浴して心身を清める。

第四部は「陟降」の句以下の十八句で、佐竹は「到達した「仙都」の様相」と小題をつける。麓を出発して「信宿（二泊）」で仙都に着く。そこにはきらびやかな宮闕や庭園が広がっており、神木や霊泉などが描かれている。佐竹はこの賦の描く仙境は旧態然としたものに留まっていたことを指摘するが、本稿では仙都の入り口に「雙闕（門）」が道を夾んでいたこと、「瓊臺（玉の台）」が天に届かんばかりに聳えていたとあることに注目する。¹¹

第五部は「於是」の句以下の二十八句で、佐竹は「神仙たちの会合と悟達の成就」と小題をつける。

4. 考察

以上の概要から、孫綽における天台山の地理知識をまとめてみる。先ず天台山の存在自体についてであるが、この山は間違いなく霊山ではあったのだが、それ故に逆に人に知られることや書物に記されるのが少なかったという。そして気高いこの山には穢れた俗人は思いを馳せることすら出来ないが、熱心に神を信じるものであれば、僅かの間に二度も訪れることも出来る。神山が再訪を拒むのは陶淵明の「桃花源記」始めよく知られることだが、天台山はこちらの心持ちがよければ再訪可能であるように見える。

次に山への登攀について見てみる。麓には雑木林が茂っていて、人が登るのを拒んでいる。山中には妖怪や山の神が跋扈する場所や、何者をも存在しない「無」の世界があり、そこを押し分けて山に入り進まなければならない。しかし、神を信じて潔斎したものであれ

ば、険しい登攀行動は避けられないが、山中遊行は可能である。

具体的な場所の名前で言えば、天台山の標識と言えるものに、赤城と飛瀑がある。赤城は「赤城山」として固有名詞化していると考えられるが、飛瀑という語自体は一般名詞であろう。しかしここで言っているのは飛瀑一般ではなく、天台山中奥深くにある石梁飛瀑を指しているよう。その点では、特定の場所を示す言葉として用いられていると言える。また前者は南側から天台山に入る際の入り口に聳えており、後者は山の奥深くに位置していることから、両者は天台山遊行の出発点と到着点を示していると言える。

その両者の間にある地名や形象としては、檜溪・靈溪という谷川があり、それらを渡って進むことになる。また険しい崖をよじ登ることも必要だが、草原や松林など心身を休める場所もある。そして仙都には双闕や瓊台といった輝かしい建造物（あるいは建造物と見まがう自然物）が聳えているのである。

右に見た場所の名前のうち、赤城・檜溪などは既に固有名詞化していると思われる。靈溪・双闕・瓊台などは、後世の文献では固有名詞化しているが、孫綽の段階でそうであったかについては確証がなく、一般名詞として用いられていた可能性も高い。しかしこれらは唐代には固有名詞化しているが、その契機は「遊天台山賦」にあることが予想される。つまりこの賦が諸書に繰り返し引用されていく中で、これらの語が天台山に固有のものとして認識されるようになり、ついには天台山内のある場所や事物をさす固有名詞として定着していったのではなからうか。

⑱ 山居賦 謝靈運

☆前集卷上（序なし、賦の第十二章の途中まで）

★宋書卷六十七謝靈運伝、類從卷六十四齋の項（序・第四章・第五章・第二十九章・第三十一章・第三十三章・第三十五章・第三十九章・第四十四章の抜粋）、全宋文卷三十一

*この賦も全文が長大なことから、天台山との関わりに着目して節録とした。また具体的な選び方などは■解説で述べた。また本文などでもともと空格だったところは□で表記した。

〔序文〕

■本文と訓訳

古巢居穴處曰巖棲、棟宇居山曰山居、在林野曰丘園、在郊郭曰城傍。四者不同、可以理推。言心也、黃屋實不殊於汾陽。即事也、山居良有異乎市廛。抱疾就閑、順從性情、敢率所樂、而以作賦。揚子雲云、「詩人之賦麗以則。」文體宜兼、以成其美。今所賦既非京都・宮觀・遊獵・聲色之盛、而紱山野・草木・水石・穀稼之事、才乏昔人、心放俗外、詠於文則可勉而就之、求麗邈以遠矣。覽者廢張・左之艷辭、尋臺・皓之深意、去飾取素、儻值其心耳。意實言表、而書不盡。遺迹索意、託之有賞。其辭曰、

古えは巢居・穴處を巖棲と曰い、棟宇して山に居るを山居と曰い、

林野に在るを丘園と曰い、郊郭に在るを城傍と曰う。四者同じからざること、理を以て推すべし。心を言うや、黄屋は實に汾陽に殊ならず。事に即くや、山居は良に市廛に異なること有り。

疾を抱き閑に就き、性情に順從して、敢へて樂しむ所に率^{したが}て、而して以て賦を作る。揚子雲云ふ「詩人の賦は、麗しくして以て則あり」と。文體は宜しく兼ねて、以て其の美を成すべし。今賦する所は既に京都宮觀遊獵聲色の盛なるに非ずして、山野草木水石穀稼の事を敘するなり。才は昔人より乏しく、心は俗外に放ちたれば、文を詠じては則ち勉めて之を就^むすべきも、麗を求むること逸として^すに遠し。覽る者、張・左の艷辭を廢し、臺・皓の深意を尋ね、飾を去りて素を取らば、儻^もしくは其の心に値^あはんのみ。意は實に言もて表さんとするも、而も書は盡くさず。迹を遺^{わす}れて意を索^とむること之を有賞に託さん。其の辭に曰く、

■校勘

*天台前集に収録されている部分とそうではないものがあるため、今回は全文収録されている『宋書』謝靈運伝所引のものを底本として校勘する。(一)類從作上古。(二)類從無棟宇二字。

■語注

○巢居穴處―『韓非子』五蠹篇に「上古之世、人民少而禽獸衆。人民不勝禽獸蟲蛇。有聖人作、構木爲巢、以羣害」とあり、『莊子』盜跖篇に「古禽獸多、人民少。于是民皆巢居以避之」とある。また『漢書』卷七〇睦兩夏侯京翼李伝に翼奉の言として「知日蝕地震之效昭然可明、猶巢居知風、穴處知雨（私は、日蝕や地震の兆しを明らかにすることができ

るが、それは巢に棲むものが風を予知し、穴に棲むものが雨を予知するのと同じである」とあり、顔師古は「巢居、鳥鵲之屬也。穴處、狐狸之類也。」と注す。また謝靈運のこの賦でも、第六章の自注に『易経』繫辭伝下の次の文を引用する。「易云、上古穴居野處。後世聖人、易之以宮室、上棟下宇、以蔽風雨」。○丘園―『易経』賁に「六五、賁于丘園（丘園に飾る）」とあり、疏は「丘園、是質素之處」と注す。また謝靈運「九日従宋公戲馬臺集送孔令詩」〔『文選』巻二二〕に「彼美丘園道、唱焉傷薄劣（あのすばらしい丘園へと続く道を進まれる孔令に対し、自分の才の劣っていることのため息が出る）」とあり、李善は「周易曰、六五賁于丘園。王肅曰、失志無應、隱處丘園」と注する。○黄屋―天子の車蓋。転じて天子そのものを指すこともある。謝靈運「従游京口北固應詔詩」〔『文選』巻二二〕に「玉璽戒誠信、黄屋示崇高（天子は玉の印を帯びてその誠信さを自ら戒め、黄屋の車に乗ってその崇高さを人々に示す）」とある。ここでは天子の車の通る都と解した。○汾陽―汾水の北。堯がここに遊んで四人の賢者と出会い、天下のことを忘れたという故事（『莊子』逍遙遊篇）があり、謝靈運「従游京口北固應詔詩」に「昔聞汾水游、今見塵外鯁（かつて堯が汾水で遊び帰るのを忘れたという話を聞いたことがあるが、今は天子が浮き世の外に馬を進められるのを見る）」とある。○揚子雲―揚雄（前五三―後一八）の姓と字。蜀郡成都の人。若くして学を好んだが蜀が僻遠の地であったため、より一層の学問の向上を目指して、年三十を越えたころに上京。やがて見いだされて官吏に登用され、劉向一族や班氏一族、また当時はまだ外戚の王氏一族の若者であった王莽らと親交を深めた。王莽の出世に伴い揚雄も諸官を歴任し、王莽新の天鳳五年に没した。若い頃は賦を盛んに制作したが、後に賦の価値を否定し、『太玄経』『法言』などの儒家的な著述を行った。『漢書』巻八七本

伝。町田三郎「揚雄について」（『秦漢思想史の研究』研文出版、一九八五）他。「詩人之賦、麗以則」は『法言』巻二「吾子篇」にある。○張左―張衡（七八―一三九）と左思（二五〇―三〇五）。いずれも賦の名手で、両者ともに「三都賦」〔『文選』所収〕が知られる。○臺皓―臺は後漢の隱者、臺修。字は孝威、魏郡鄴の人。武安山に入り、穴を穿って居となし、薬を採集して生業とした。章帝の建初中（七六―八四）しきりに召されたが、遂に出仕しなかった（『後漢書』巻八三「逸民伝」。「山居賦」第四十五章は古来の隱者を紹介するが、その中に「臺依崖而穴墀（臺修は崖によって階のようなところに穴居した）」とあり、自注に「臺孝威居武安山下、依崖爲土室、采藥自給（臺孝威は武安山の麓に居り、崖を利用した土室を作って棲み、山薬を採集して自給した）」とある。皓は四皓。四人の高徳の隱者で、秦末の乱を避けて商山に隱棲していたが、高祖の後継者争いの折りに呂后の請いで下山し、決着をつけて去った（『史記』巻五五「留侯世家」。「山居賦」第四十五章に「皓棲商而頤志（四皓は商山に隱棲し、志を養った）」とあり、自注に「四皓避秦亂、入商洛深山、漢祖召、不能出（四皓は秦末の戦乱を避け、商・洛の深い山に入った。漢の高祖が召し出そうとしたが叶わなかった）」とある。○意實言表、而書不盡―『易経』繫辭上篇に「子曰、書不盡言、言不盡意。（略）聖人立象以盡意、設卦以盡情偽、繫辭焉以盡其言。（先生は自問自答される「文字に書かれたものはいいたいことを述べ尽くしていない、言葉に出したものは思いを表現し尽くしていないのではないだろうか」と。（略）（そこで）聖人は八卦という象を立てて言葉の伝え得ない真意を尽くし、更に複雑な六十四卦を設けて物事の真偽を尽くし、これに卦辭爻辭を加えて言いたいことを尽くしたのである）」とある。

■口語訳

昔は、鳥のように樹上に巢を営んで棲んだり、動物のように穴に棲むのを「巖棲」といい、家屋を山中に作って棲むのを「山居」といい、平野の林や原野に棲むのを「丘園」といい、都城の城壁の周辺に棲むのを「城傍」といった。この四者が同じでないことは、理によって推測できよう。心のあり方からいえば、天子の車のある都として、汾水の北の隱棲の地と同じになるかもしれないが、事柄から見れば、山居は町中の邸宅に住むこととは異なるのである。

さて、私は病によって閑居の身となったので、性情のままに、楽しむところに従って賦を作った。

かの漢代の揚雄は、「詩経の詩人たちの「賦」は、麗しく、且つそこに則^のがあつた」といった。つまり文章の体は、いくつかの要素が兼ね備わってはじめて美をなすのである。しかし、今私が賦するところは、もとより大都市・宮殿や第館・狩猟の遊び・音楽や様々な色などといったものの盛んな様ではなく、山岳や原野・草木・川や石・穀物の実りといったことを叙述したに過ぎない。

私の才能は故人には及ぶものではなく、心も世俗の外に放つてないので、文章を詠ずる場合に努力をしてそうしようとはするのだけれど、麗しさを求めることなどとうていできそうにない。

私の賦を御覧になる方々は、張衡や左思のような華麗な文辞を期待することはやめていただき、臺修や四皓の深い思慮を尋ねていただき、修飾を去って素の部分に目を向けていただければ、あるいは御心に適うことがあるかもしれない。

そもそも、意を言葉で表そうとしても、書物は言葉を尽くすことができないものである。文章という仮の入れ物のことを忘れて真意

を求めることは、これを後世の理解者に託そうと思う。その賦は次の通り。

〔賦・第一章〕～〔賦・第五章〕略

〔賦・第六章〕

■本文と訓訳

其居也

其の居や

左湖右江

湖を左にして江を右にし

往渚還汀

往く渚、還る汀あり

面山背阜

山に面して阜を背にし

東阻西傾

東は阻まれ西は傾く

抱含吸吐

包含し吸吐し

款跨紆縈

款跨し紆縈す

縣聯邪亘

縣聯として邪に亘るあり

側直齊平

側直なるは齊しく平らなり

〔自注〕

枚乘曰、「左江右湖、其樂無有。」此吳客說楚公子之詞。當謂江都之野、彼雖有江湖而乏山巖、此憶江湖左右與之同、而山嶽形勢、池城所無也。往渚還汀、謂四面有水。面山背阜、亦謂東西有山。便是四水之裏也。抱含吸吐、謂中央復有川。款跨紆縈、謂邊背相連帶。迂回處謂之邪亘、平正處謂之側直。

枚乗曰く、「江を左にして湖を右にす、其の楽しみ有る無し」と。
此れ呉客の楚の公子に説くの詞なり。當に江都の野を謂うなるべし。
彼は江湖有りと雖も山巖に乏し。此は江湖の左右なるは之と同じく
して、山嶽の形勢は、池城に無き所なりと憶う。「往渚還汀」とは、
四面に水有るを謂う。「面山背阜」も、亦た東西に山有るを謂う、便
ち是れ四水の裏なり。「抱含吸吐」とは、中央に復た川有るを謂うな
り。「款跨紆紜」とは、邊背相い連帶するを謂うなり。迂回する處
之を「邪亘」と謂い、平正なる處 之を「側直」と謂う。

校勘

（一）前集作岨。

語注

○枚乗（？）前（一四一）。江蘇淮陰の人。景帝の時に呉王や梁王に仕え
た。美文を以て知られた。『漢書』卷五一本伝。この句は「七発」（『文選』
卷三四）にあり、李善は「左江右湖、其樂之忘死。無有、天下無有」と
注す。「七発」は謝靈運が言う如く、呉の客が病の楚の太子を見舞い、
種々の楽しみを述べて励ますというものである。当該句は高い台に登つ
て美しい山川を眺める楽しみを述べる箇所にある。

口語訳

その居は、

湖を左に見て江を右に見、往く渚と還る汀とがあり四面を水に囲ま
れている。

山に面していて阜を背にしており、東は山に阻まれていて西に傾い

ている。

中に川を包含して水が出入りし、臨んでまたがり、まとい巡つ
ている

ずっと連続して迂回しているところがあり、平らなところはどこま
でも平らである。

自注

枚乗の「七発」に「長江を左に見て洞庭湖を右に見る。この楽し
みは天下に比べものになるものではありません」とある。これは呉の
客が楚の公子に説いた言葉である。ここでは江都の野のことを述べ
ているのであろう。ただそちらには江と湖とはあるけれども山巖に
は乏しい。それに比べ、始寧は江湖を左右に見るのは枚乗の場合と
同じであって、加えて山嶽の形勢があつて、それは平地の池城には
無いものだと考える。「往渚還汀」とは、四面に水があることを言う。
「面山背阜」も、東西に山があるのを言う。それは四面の水の内側
である。「抱含吸吐」とは、その場所の中央に復た川があるのを言う。
「款跨紆紜」とは、へりから後まで連続していることを言う。迂回
するところを「邪亘」と言い、平正なる所を「側直」と言う。

賦・第七章

本文と訓訳

近東則上田下湖

近東は則ち上田・下湖あり

西谿南谷石塚石滂

西谿・南谷・石塚・石滂あり

閔磻黄竹

閔磻・黄竹あり

決飛泉於百仞

飛泉を百仞に決し

森高薄於千麓 高薄を千麓に森とす
 寫長源於遠江 長源を遠江に寫し
 派深岫於近瀆 深岫を近瀆に派す

〔自注〕

上田在下湖之水口、名爲田口。下湖在田之下、下處並有名山川。西谿・南谷分流、谷郭水吠入田口。西谿水出始寧縣西谷郭、是近山之最高峰者、西溪便是□之背。入西谿之裏、得石塚、以石爲阻、故謂爲塚。石滂在西谿之東、從縣南入九里、兩面峻峭數十丈、水自上飛下。比至外谿、封燈十數里、皆飛流迅激、左右巖壁綠竹。閔剛、在石滂之東谿、逶迤下注良田。黃竹與其連、南界莆中也。

上田は下湖の水口に在り、名して田口と爲す。下湖は田の下に在り、下處は並びに名山川有り。西谿・南谷は分流し、谷郭水は吠こゑぎて田口に入る。西谿の水は始寧縣の西谷郭に出ず、是れ近山の最高峰なる者にして、西溪は便ち是れ□の背なり。西谿の裏に入れば、石塚を得、石を以て阻と爲す、故に謂いて塚と爲す。石滂は西谿の東に在り、縣の南より入ること九里、兩面峻峭なること數十丈、水は上より飛び下る。外谿に至る比よ、封燈十數里、皆飛流迅激なり、左右の巖壁は綠竹なり。閔剛は、石滂の東谿に在り、逶迤して下り良田に注ぐ。黃竹は其と連なり、南のかた莆中を界するなり。

■語注

○上田、下湖、西谿、南谷、谷郭水、石塚、石滂、閔剛、黃竹、莆中―
 いずれも地名や事物の名だろうがどういふものかは不詳。○封燈―きざ
 はし、坂。

■口語訳

近い東には上田・下湖、西谿・南谷・石塚・石滂、閔剛・黃竹がある
 飛泉が百仞もの高さから流れ落ち、背の高い草むらが広い麓に茂っている
 遠い水源の水を遠い江に流し、深い泉の水は近い川に流す

〔自注〕

上田は下湖の水口にあり、田口と名づける。下湖は田の下にあり、下のところにはどこにも名山川がある。西谿・南谷は分流しており、谷郭水が田口に注ぎ入っている。西谿の流れは始寧縣の西谷郭から出ている、この山はこの近くの最高峰である、西溪は□の背にあたる。西谿の中に入ると、石塚がある。石で流れを堰き止めているので、塚という。石滂は西谿の東にある。始寧縣の南から流れ入ること九里の間、川の両面が険しいことは数十丈あり、泉水が上から飛び下っている。西谿のはずれに至るころには、階段状の場所が十數里にわたり、飛流は迅激である、左右の巖壁は緑の竹林である。閔剛は、石滂の東の谿にある。くねくねと曲がり下って良田に注いでいる。黃竹がこれと連続していて、南のかた莆中との境を区切っている。

〔賦・第八章〕

■本文と訓訳

近南則會以雙流

近き南は則ち會するに雙流を以てし

縈以三洲

縈らすに三洲を以てす

表裏回游

表裏回游し

離合山川

山川に離合す

嶂崩飛於東峭

嶂は崩れて東峭に飛び

縈傍薄於西阡

縈は傍して西阡に薄るせま

拂青林而激波

青林を拂つて波を激し

揮白沙而生漣

白沙を揮つて漣を生ず

〔自注〕

雙流、謂剡江及小江、此二水同會於山南、便合流注下。三洲在二水之口。排沙積岸、成此洲漲。表裏離合、是其貌狀也。嶂者謂回江岑。在其山居之南界。有石跳出、將崩江中、行者莫不駭慄。縈者是縣故治之所。在江之□□。用縈石竟渚。並帶青林而連白沙也。

雙流は、剡江及び小江を謂う。此の二水は山の南に同會し、便ち合流して注ぎ下る。三洲は二水の口に在り。沙を排して岸に積み、此の洲の漲を成す。表裏・離合は、是れ其の貌狀なり。嶂は回江の岑を謂う。其の山居の南界に在り。石の跳び出でて、將に江中に崩れんとする有り、行く者駭慄せざる莫し。縈は是れの故治の所なり。江の□□に在り。縈石を用つて渚を竟す。並びに青林を帯びて白沙

に連なるなり。

■語注

○剡江・小江―川の名前だろうが詳しいことは未詳。

■口語訳

近い南には二筋の流れが合流しているところがあり
三つの中洲を廻っている
中洲の内と外には流れが回避し
山や川に接したり離れたりにしている
嶂が崩れかかるようにして東の崖から飛び出し
縈が西のあぜの傍らに迫っている
川は青い林を払うように波を立て
白い砂を振るいながらさざ波を立てている

〔自注〕

二筋の流れとは、剡江と小江をいう。この二水は山の南で出会い、そのまま合流して流れ下る。三洲は二水の口にある。川沙を推して岸に積みあげ、この洲を成長させている。表裏・離合というのは、この川と中洲との様子を表したものである。嶂は江がめぐっている岑をいう。山居の南界にある。石が跳び出すようにして今にも江の中に崩れ落ちようとしている。そのためその下に行く者は、恐れおののかないものはいない。縈は元の治所があったところである。江の□□にある。縈石で渚と境をなしている。ずっと青い林を帯びていて白い沙浜に連なっている。

〔賦・第九章〕

■本文と訓詁

近西則楊賓接峰

近き西は則ち楊・賓の峰に接す

唐皇連縱

唐・皇連縦す

室壁帶谿

室と壁とは谿を帯び

曾孤臨江

曾と孤と江に臨む

竹縁浦以被綠

竹は浦に縁いて以て緑に被われ

石照澗而映紅

石は澗を照らして紅に映ず

月隱山而成陰

月は山に隠れて陰を成し

木鳴柯以起風

木は柯に鳴きて以て風を起こす

〔自注〕

楊中元賓、並小江之近處、與山相接也。唐皇便從北出。室、石室、在小江口南岸。壁、小江北岸。並在楊中之下。壁高四十丈、色赤、故日照澗而映紅。曾山之西、孤山之南、王子所經始、並臨江、皆被以綠竹。山高月隱、便謂爲陰。鳥集柯鳴、便謂爲風也。

楊中・元賓は、並びに小江の近き處にして、山と相い接するなり。唐皇 便ち北より出づ。室は、石室なり。小江の口の南岸に在り。壁は、小江の北岸なり。並びに楊中の下に在り。壁は高さ四十丈、色赤し。故に「澗を照らして紅に映ず」と曰う。曾山の西、孤山の南は、王子の經始せる所なり。並びに江に臨む。皆 被うに綠竹を以てす。山高く月隱る。便ち謂いて陰と爲す。鳥集り柯鳴く、便ち謂いて風と爲す。

■校勘

- 〈一〉前集作塘埭。
- 〈二〉前集作蹤。
- 〈三〉前集作溪。

■語注

○楊中、元賓―山の名か。未詳。○唐皇―山の名前か。あるいは唐山と皇山のふたつか。未詳。○谿―前集は溪に作る。そうであれば、谷川となる。○曾山、孤山―これも山の名前か。あるいは一般名詞であれば、曾山は層を成す山、孤山は独立峰となる。○王子―王子晋か？○經始―建物を建て始めること。『詩經』大雅靈台に「經始靈臺、經之營之（靈台を造り始める、測量を行い作業を営む）」とあり、本賦自注にも「經始山川、實基於此（山川に建物を営み始め、ここに基点を定めた）」とある。○木鳴柯以起風―この句、注によれば鳥が枝に留まって鳴いていることのようにだが、本文をそのまま読めば、風の音を表現しているようである。

■口語訳

近い西には楊中と元賓が峰に接しており、唐皇が縦に連続している。石室と壁のような岸が谿を夾んで向かい合っており、曾山と孤山とが江に臨んでいる。

竹が水際を縁取るようにして緑に被われ、石の照り返しが谷川に反射し向こう岸の壁を紅く染めている。

月が山に隠れてあたりを暗くし、木が枝を鳴らし風が起きている。

〔自注〕

楊中と元賓は、ともに小江に近いところにあり、山と接している。唐皇がそのまま北へと延びている。室は、石室である。小江の口の

南岸にある。壁は、小江の北岸のことである。ともに楊中の下にある。壁は高さが四十丈あり、色が赤い。だから「潤を照らして紅に映ず」というのだ。曾山の西、孤山の南は、王子晋が建物を営んだところである。共に江に臨んでいる。皆緑の竹で被われている。山が高く、月が隠されていることを、陰と表現している。鳥が集まって枝で鳴いているのを、風と表現している。

〔賦・第十章〕

■本文と訓訳

近北則二巫結湖

近き北には則ち二巫湖を結び

兩智通沼

兩智 沼を通ず

横石判盡

横・石は判れ盡き

休周分表

休・周も分れ表わる

引修隄之透池

修隄の透池たるを引き

吐泉流之浩漾

泉流の浩漾たるを吐く

山巖下而回澤

山巖 下りて澤を回り

瀨石上而開道

瀨石 上りて道を開く

〔自注〕

大小巫湖、中隔一山。外智周回、在圻西北。邊浦出江、並是美處。義熙中、王穆之居大巫湖、經始處所猶在。兩智皆長溪、外智出山之後四五里許、裏智亦隔一山、出新塚。横山、野舍之北面。常石、野舍之西北。巫湖舊唐、故曰修隄。長谿甚遠、故曰泉流。常石巖□□□。故曰山巖下而回澤。裏智漫石數里、水從上

過、故曰瀨石上而開道。休山東北、周里山在休之南、並是北邊。

大小の巫湖あり、中ごろ一山に隔てらる。外智周回し、圻の西北に在り。浦に邊して江に出づ。並びに是れ美しき處なり。義熙中、王穆之 大巫湖に居る、經始する處所猶お在り。兩智は皆に長溪なり。外智は山の後ろ四、五里許に出で、裏智も亦た一山を隔てて、新塚に出づ。横山は、野舍の北面にあり。常石は、野舍の西北に在り。巫湖に舊唐あり、故に「修隄」といふ。長谿甚だ遠し、故に泉流と曰う。常石巖□□□。故に「山巖下而回澤」と曰う。裏智は石に漫すること數里、水上より過ぐ、故に「瀨石上而開道」と曰う。休山の東北、周里山は休の南に在り、並びに是れ北邊なり。

■校勘

（一）前集作磯。

■語注

○巫湖―校注は後世の太康湖のことで、早くに湮滅していたものだとし、謝靈運「於南山往北山經湖中瞻眺詩」〔文選〕卷二二の湖がこれだといふ。○智―諸字書にも見えないが、謝靈運の自注によれば、長い谷川のこと。校注では、清錢大昕の「二十二史考異」での「この字は誰も知らない」という意見と、李慈銘の「宋書札記」での「誤字ではなく、當時の方言ではないか」という意見を収録している。○横、石、休、周―いずれも山の名らしい。自注によれば、横山、常石山、休山、周里山。○巖―この字も諸字書に見えない。校注は磯の異体字ではないかとする

が、前集では磯と作る。○義熙、東晋安帝の年号（四〇五～四一八）。

○王穆之「不詳。『宋書』には明帝の太始七年（四七二）に汝陰太守の王穆之が賊軍に殺されたとあるが（卷八明帝本紀）、この王穆之は、太原の王氏のひとりて明帝期に龍驤將軍として南伐に功績のあつた人物だろうと考えられる（同卷七四・八四）。しかし、謝靈運が賦の自注で言及している王穆之は晋の義熙中に盧を結んでおり、太原の王穆之の没年とは六十年近い隔たりがある。同一人物ではなからう。

■口語訳

近い北には二つの巫湖があり、二本の谷川が沼沢地を貫通している
横山と常石はふたつに分かれ、休山と周里山も分かれている
長い堤防がうねうねと伸びており、豊かな水量の川が注いでいる

〔自注〕

大小ふたつの巫湖があり、一つの山で隔てられている。外智がその周りを回っており、圻山の西北に位置している。水際沿いに流れて江に注いでいる。共に美しい場所である。義熙年間、王穆之は大巫湖に居を定めたが、その折りに営まれた場所が今なお現存する。兩智はどちらも長い谷である。外智は山の後ろ四、五里ばかりの所に出ている、裏智もまた山をひとつ隔てて、新塚に出ている。横山は、野舎の北面にある。常石は、野舎の西北にある。巫湖には舊唐があるので、「修隄」という。長い谷が遠くまで続いている、だから「泉流」と言う。常石巖□□□□。だから「山巖下りて澤を回る」と言う。裏智は石に数里に渡って浸っており、水が上から注いでいる。だから「瀬石が上って道を開く」と言う。休山は東北にあり、

周里山は休山の南にある。共に北のはずれである。

〔賦・第十一章〕

■本文と訓訳

遠東則天台桐柏	遠東は則ち天台・桐柏
方石太平	方石・太平
二韭四明	二韭・四明
五輿三菁	五輿・三菁
表神異於緯牒	神異を緯牒に表し
驗感應於慶靈	感應を慶靈に驗す
凌石橋之莓苔	石橋の莓苔を凌ぎ
越檜谿之紆縈	檜谿の紆縈を越ゆ

〔自注〕

天台桐柏、七縣餘地、南帶海。二韭・四明・五輿、皆相連接、奇地所無、高於五嶽、便是海中三山之流。韭以菜爲名。四明・方石、四面自然開窗也。五輿者、曇濟道人・蔡氏・郗氏・謝氏・陳氏各有一輿、皆相倚角、並是奇地。三菁、太平之北。太平、天台之始。方石、直上萬丈、下有長谿、亦是縉雲之流云。此諸山並見圖緯、神仙所居。往來要徑石橋、過檜谿、人跡之艱、不復過此也。

天台・桐柏は、七縣の餘地にして、南は海を帶ぶ。二韭・四明・五輿は、皆相い連接し、奇地の無き所にして、五嶽より高し、便ち

是れ海中の三山の流なり。韭は菜を以て名と爲す。四明・方石は、四面自然と開窗す。五輿は、曇濟道人・蔡氏・郗氏・謝氏・陳氏、各々一輿有り、皆相い倚角し、並に是れ奇地なり。三菁は、太平の北なり。太平は、天台の始なり。方石は、直ちに上ること萬丈、下に長谿有り、亦た是れ縉雲の流なりと云ふ。此の諸山並びに圖緯に見ゆる、神仙の居る所なり。往來には石橋を徑し、檣谿を過ぎるを要す。人跡の艱にして、復た此を過ぎざるなり。

■校勘

〈一〉前集作驗。

■語注

○天台―山名。浙江省台州天台県域にあり、仏道双方の名山であったが、その名を記した信頼できる資料は、東晋葛洪『抱朴之』金丹篇・孫綽『遊天台山賦』（『文選』所収）あたりからである。○桐柏―山名。今は天台山中の峰のひとつだが、唐代以前はしばしば天台山と同視されていた。梁陶弘景『真誥』卷一四稽神樞などにその名が見られる。「太平御覽」卷四三引く「河図括地象」に「桐柏山爲地穴、上爲維星」とある。○方石、二韭、五輿、三菁―いずれも山の名であるが、不詳。方石は四角な石。自注によれば、四明と同様で、山の形が四面切り立っているからの命名となる。韭は植物のニラの類。自注によれば、山の形がニラに似ている、もしくはその山にニラを産するからの命名となる。輿は奥まったところ。自注によれば、五人の人物がそれぞれ居住していたことからの命名となる。○菁―ニラの類。あるいは花などが盛んに茂る様。○太平―山名。浙江省余姚県の西南。余姚江の源。『芸文類聚』卷八に太平山があり、晋孫綽

「太平山銘」や南斉孔稚珪「遊太平山詩」などを引く。○四明―山名。浙江省余姚県の南。三十六洞天の第九。孫綽「遊天台山賦」に「登陸、則有四明天台」とある。自注によれば、四面に自然の明かり取りの窓が開いているかのように見えることからの命名となる。○緯牒―緯は緯書。牒は文書。○感應―応え応ずること。『易経』咸に「二氣感應、以相與（陰陽の二氣が感應し、それによって和合する）」とある。○慶靈―めでたい神靈。謝靈運「婦塗賦」にも「承百世之慶靈、遇千載之優渥（百世に一度のめでたい神靈に出会い、千年に一度の恩沢に遭遇する）」とある。○石橋之莓苔―いわゆる石梁飛瀑のことでそこを渡るのが難しいことをいう。天台山を代表する奇勝で、孫綽「遊天台山賦」にも「踐莓苔之滑石、搏壁立之翠屏（苔に被われた滑りやすい石（橋）を踏み渡り、壁のようにそそり立っている緑の屏風につかまる）」とある。○檣谿―檣溪も天台山にある川で、孫綽「遊天台山賦」にも「濟檣溪而直進、落五界而迅征（檣溪を渡って真っ直ぐ進み、五界の界下って足を急がせる）」とある。遠東として様々な場所や山の名があげられているが、それらを描写した最後の二句はいずれも天台山のみに関わるものである。○七縣餘地―「五県の余地」という表現が、孔靈府「会稽記」（『太平御覽』卷四一）や唐徐靈府撰「天台山記」に見える。しかし五県が具体的に何を指すかは両資料に相違がある。○帶海―天台山は海に面しているわけではないが、その最高峰の華頂峰からは海が望見されるとされ、望海尖の異称もある。○海中三山―蓬萊・方丈・瀛州。東海の彼方にあり、神仙が棲むとされた（『史記』卷六秦始皇本紀他）。○曇濟道人・蔡氏・郗氏・謝氏・陳氏―いずれも人名だが不詳。天台山に関わりのある僧侶として曇猷の名が伝わる。蔡氏は不詳だが、同時代の文人に蔡廓（三七九―八二四）がいる。武帝に登用され、尚書などを歴任した。『宋書』卷五

七本伝。「宋太卿蔡廓集九卷」があつたらしいが伝わらない。郝氏はあるいは第十二章に見える郝景興か。謝氏は謝靈運を含む謝氏一族か。○犄角―前後相応じて事に当たること。後から鹿の足を拵き、前から角をつかむことから。『春秋左氏伝』襄公十四年条。ここでは五つの奥が連続してつながっていることを言うか。○縉雲―山名。浙江省縉雲県にある山の名。唐の天宝年間より仙都山と呼ばれている。「洞天福地天地宮府図」には、「三十六小洞天。第二十九仙都山洞、周回三百里。名曰仙都祈仙天。在處州縉雲縣。屬趙真人治之」とある。徐靈府「天台山記」（三丁裏）でも「天台山」南馳縉雲、北接四明」とあり、四明山とともに天台山に近いものとの認識を示す。

■口語訳

遠い東には天台山・桐柏山、方石山・太平山
 また二韭・四明、五奥・三菁がある
 不思議なことが緯書に記してあり、感応がめでたい神靈に応じてなされる
 苔むした石橋を踏み渡り、うねうねとした檣溪を越えて山に入つてゆくのだ

〔自注〕

天台・桐柏は、七県のはずれの地にあり、南には海を帯びている。二韭・四明・五奥は、すべてあい連なっており、不思議な土地が無いところであるが、五岳よりも高い。いわゆる海中の三神山の類である。韭は野菜の名から来ている。四明・方石は、山の四面が自然の窓が開いているように切り立っている事から来ている。五奥は、

曇濟道人・蔡氏・郝氏・謝氏・陳氏がそれぞれ一奥を占めていて、それぞれ前後相つながつている。いずれも不思議な土地である。三菁は、太平山の北にある。太平山は、天台山系の始めである。方石は、まっすぐ一万丈も切り立っている、下には長い谷があり、これも亦た縉雲山の類であるといわれる。これらの諸山についてはいずれも河図洛書や緯書に見えている、神仙の居所である。行き来するには石橋を渡り、檣谿を越えてゆく必要がある。人が尋ねるには艱難のところであつて、一旦帰つた後は再び訪れることができない。

〔賦・第十二章〕

■本文と訓訳

遠南則松箴棲雞	遠き南は則ち松箴・棲雞
唐巖漫石	唐巖・漫石あり
崒嵯對嶺	崒・嵯は嶺を對し
龍孟分隔	龍・孟は分け隔つ
入極浦而遄回	極浦に入りて遄回しすれば
迷不知其所適	迷いて其の適くところを知らず
上嶽崎而蒙籠	上は嶽崎にして蒙籠たり
下深沈而澆激	下は深沈として澆激たり

〔自注〕

棲雞、在保口之上。別浦入其中、周回甚深、四山之裏。松箴在棲雞之上、縁江。唐巖入太平、水路上有瀑布數百丈。漫石在唐巖下、郝景興經始精舍、亦是名山之流。崒嵯與分界。去山八十里、故曰遠南。前嶺鳥

道、正當五十里高、左右所無、就下地形高、乃當不稱遠望。崑山甚奇、謂白爍尖者最高、下有良田、王敬弘經始精舍。曇濟道人住孟山、名曰孟埭、芋薯之膠田。清溪秀竹、廻開巨石、有趣之極。此中多諸浦澗、傍依茂林、迷不知所通、嶽崎深沈、處處皆然、不但一處。

棲雞は、保口の上在り、別浦其の中に入り、周回すること甚だ深く、四山の裏にあり。松箴は棲雞の上在りて、江に縁す。唐巖は太平山に入る。水路の上に瀑布の數百丈なる有り。漫石は唐巖の下在り、郝景興精舎を經始す、亦た是れ名山の流なり。崧と嵎とは與に界を分かち、山を去ること八十里なり、故に遠南と曰う。前の嶺は鳥道にして、正に五十里の高さに當る。左右に無き所なり。下に就けば地形は高し、乃ち當に遠望を稱はざるべし。崑山は甚だ奇にして、白爍尖と謂うもの最も高し。下に良田有り、王敬弘精舎を經始す。曇濟道人は孟山に住む、名づけて孟埭と曰う、芋薯の膠田なり。清溪・秀竹あり、巨石を廻らし開く、趣の極まる有り。此の中に諸浦澗多く、傍は茂林に依る。迷ひて通ずる所を知らず。嶽崎・深沈は、處處皆な然り。但に一處のみならず。

■校勘

〈一〉前集作巖。

■語注

○松箴・棲雞・唐巖・漫石・嵎・孟・保口―山の名だろがいずれも不詳。箴は針。松箴は松葉のことか。巖は険しいこと。漫は広い、散らば

るの意がある。○崧―山の名。校注は浙江嵎県にある嵎大山のことだと

する。○逕回―巡りうねり行くこと。○崑―諸字書に見えない。校注

は崑(山の険しい様子)の変体ではないかとする。○嶽崎―山の険しい様。○蒙籠―草木のはびこる様。孫綽「遊天台山賦」にも「披荒榛之蒙

籠、陟峭嶠之崢嶸(雜木の叢がはびこったところを切り開いて押し分け、そそり立つ断崖に登る)」とある。○深沈―奥深く静かなこと。謝靈運

「晚出西射堂詩」(『文選』卷三二)にも「連障疊嶠、青翠深沈(連なる切り立った峰々は重なりあつており、青綠色に暗く深く沈んでい

る)」とある。○澆激―澆は注ぐ。澆激の用例には乏しいが、水が注ぎ

沸き立っている様か。○郝景興―晋の人、郝超(三三六―三七七)。桓温に召され諸官を歴任したが父に先立ち卒した。『晋書』卷六七本伝。「晋中書郎郝超集」九卷があつたらしいが伝わらない。○鳥道―鳥でなければ通れないほど高く険しい道。○白爍尖―不詳。爍は光り輝く。尖は峰

○王敬弘―劉宋の人。名は裕之。琅邪王氏のひとり。宋武帝劉裕の避諱

により、字で称される。性恬静で山水を楽しんだと称される。文帝の元嘉十二年に太子少傅に至り、翌年八十八才で没。諡は文貞公。「右光祿大夫王敬弘集」五卷があつたという(『隋書』經籍志自注)が伝わらない。

『宋書』卷六六本伝。○埭―堰。○芋薯―いも。○膠田―焼き畑。

■口語訳

遠い南には松箴・棲雞、唐巖・漫石の諸山がある

崧山・嵎山は嶺を向かい合わせにし、崑山・孟山は分かれて隔たっている

浦の極まったところから内に入って巡ると、道に迷ってどう行けばいいのかわからなくなる

山の上の方は險しく聳えて草木がはびこり、下には水が流れ込み激流が沸き立っている

〔自注〕

棲雞山は、保口山の上にある。浦から離れてその中に入ると、ぐるぐると廻つてとても深くなつていて、四方を山に囲まれている。松箴山は棲雞山の上にあつて、江に沿っている。唐巖山は太平山につながつていて、上に長さ數十丈に及ぶ滝がある。漫石山は唐巖山の下にあつて、郝景興が精舎を建てたところである。ここもまた名山の類である。崧山と崧山とはともに境界を分けている。これらは始寧の山から八十里離れている。それゆえ「遠南」というのだ。前の嶺は鳥が通るほどの道で、五十里もの高さがある。左右に比べるような山はないが、下から見れば地形が高くなつていたので、遠くを眺めることは出来ない。龍山は甚だ奇で、中でも白燦尖という頂が最も高い。下に良田がある。王敬弘が精舎を建てたところである。曇濟道人は孟山に住んでいる。名づけて孟球という。芋薯の焼き畑がある。清らかな溪流や竹林があり、巨石が廻らされて道を開いている。すばらしい情趣の場所である。この中には浦や谷川が多く、その傍らは茂つた林があり、道に迷うとどう行つていいかわからなくなる。嶽崎・深沈という表現はすべての場所に当てはまり、一箇所だけを指しているのではない。

〔賦・第十三章〕

■本文と訓訳

遠西則〔下闕〕

*第十三章は本文が脱落していて伝わらない。

〔賦・第十四章〕

■本文と訓訳

遠北則長江永歸	遠き北は則ち長江永歸し
巨海延納	巨海延納す
崑漲緬曠	崑・漲 緬曠し
島嶼網沓	島嶼 網沓す
山縱橫以布護	山は縱橫にして以て布護し
水迴沈而縈浥	水は迴沈して縈浥す
信荒極之綿眇	信に荒極の綿眇たるにして
究風波之睽合	風波の睽合を究む

〔自注〕

江従山北流、窮上虞界、謂之三河口、便是大海。老子謂海爲百谷王、以其善處下也。海人謂孤山爲崑。薄洲有山、謂之島嶼、即洲也。漲者、沙始起將欲成嶼、縱橫無常於一處、廻沈相縈擾也。大荒東極、故爲荒極。風波不恒、爲睽合也。

江は山北より流れ、上虞の界に窮まる。之を三江口と謂う、便ち是れ大海なり。『老子』に謂う「海は百谷の王たり、其の善く下に處るを以てなり。」と。海人は孤山を謂いて「崑」となす。薄洲に山有る、之を「島嶼」となす、即ち洲なり。「漲」とは、沙の始めて起り將に嶼を成さんとするものなり。「縱橫」とは常に一處においてす

る無し、廻沈して相い縈擾するなり。大荒の東極なり、故に荒極となす。風波恒ならず、睽合をなす。

■語注

○崑―自注によれば、海辺の民は独立山を崑と称していた。○漲―自注によれば、初期の砂州をかく称していた。○緬曠―熟語としての用例に乏しいが、緬は遙か遠い、曠は広い。○綱沓―綱は細かい、沓には重なるの意がある。○布護―分布する、密生する様。○浥―うるおす。○睽―そむき離れる。○上虞―県名。浙江省紹興の東。○老子―第六六章に「紅海所以能爲百谷王者、以其善下之（大河や大海がすべての谷川の王であるのは、それが最も下にいるからである）」とある。○大荒―中国からとても遠いエリア。『山海経』大荒東経に「東海之外、大荒之中、有山、名曰大言、日月所出」などがある。

■口語訳

遠い北には長江が長く流れ、それを大海が引き納めている
（大河や大海には）山島や砂州が広がり、島や中洲が細かく重なっている
山々があちらこちらに散らばっており、水がそれらを廻ってまわりつき潤している
まことに世界の果ての広がったところであり、風と波とが離れたり結んだりを究めている

「自注」

長江は山の北に流れており、上虞県で窮まっている、これを三江

口という。つまりこれが大海である。『老子』に「海がすべての谷川の王であるのは、それが下に位置することが出来るからである」という。海辺の谷は、突出している山を「崑」という。薄い中洲に山ができているのを「島嶼」という。つまり洲のことである。「漲」とは、砂が溜まり始めて「島嶼」をなし始めのものを言う。「縦横」とはいつも同じところであるというわけではないことである。水が深く廻っていて、まといつき乱れている。世界の果ての東の極である、だから「荒極」という。風と波とが吹いたりやんだりして、離れたり合わさったりを繰り返す。

「賦・第十五章」以降略

■解説

謝靈運については前稿。山居賦については、森野繁夫に訳注がある（『宋書』謝靈運伝の訳注として『謝康樂詩集』巻下（白帝社、一九九七）に、及び『謝康樂文集』（白帝社、二〇〇三）に）他、研究論文として近年のものでは塚本信也「謝靈運の『山居賦』と山水詩」（『集刊東洋学』第六五号、一九九二）、安藤信広「謝靈運の『山居賦』について」（『中国文化』五三号、一九九五）、傍島史奈「貫休『山居詩』二十四首について―謝靈運『山居賦』との関連に見る―」（『未名』一九号、二〇〇二）、齋藤希史「謝靈運の山居―〈居〉の文学（二）―」（『中国文学報』第六十一冊、二〇〇〇）などがある。¹²本文と校注では顧紹柏校注『謝靈運集校注』（中州古籍出版社、一九八七）が丁寧である。

この賦は、謝靈運が始寧に退隠した景平元年（四二三）からほど

遠くない時期の作とされる（森野、安藤）。退隱山居の意味や意義、山居のある始寧やその周辺地域の地理環境、山居の周囲や山居にある動植物、山居に作った仏寺やそれを作った経緯、仏道修行や道家的な生き方などが述べられている。『宋書』収録時点で既に脱落がかなりあるが、序文と本文が七百句以上からなる。本文は謝靈運自身によって四十六の段落（「章」と呼ぶ）に別けられている。安藤は全体を六つの大段落に分けて捉え、森野は、十四に分ける。

今回の訳注では、天台山との関わりに注目して、序文と賦の第六～十四章を扱った。該当部分は森野の分け方に従えば、第三の部分「山居の場所。周囲の地勢の概略」、第四の部分「山居の近くの東西南北の様子」、第五の部分章「山居から遠くの東西南北の様子」にあたる。天台の名が見えるのは、第十三章の「遠東」である。

以下内容について若干検討する。

序では、住まいのあり方として、巖棲・山居・丘園・城傍の四つがあるとし、山居については、「家屋を山中に作って住むこと」とする。この賦の題名と主題を示したもの。隱遁者の住まいとして山居がふさわしいとし、以下の賦本体に於いて山居の様が具体的に語られていくのである。後には山居は、山中に設けられた家屋そのものを指すこともある。第六章では始寧の山居のたまたまを述べるが、枚乗の「七発」において、「水」のすばらしさのみが語られていたのに対し、この地は、江湖という「水」に加え山岳をも備えていることとよりよきものになっているという。

第七章から第十四章においては、始寧の周りに展開する自然の名勝が述べられる。先ず第七章から第十章では、始寧から比較的近い

場所にある名勝を、東南北西の順に述べていく。次いで第十一章から第十四章で、始寧からやや遠い場所にある名勝をやはり東から順に述べている。ここでは始寧を中心とした二重の同心円が描かれており、その円周上に名勝の地が配されているといえる。謝靈運は常には始寧に居しつつ、随時にこれらの名勝の地を訪れ、様々な山水を楽しむことができるようになっていくわけである。またたくさん自然の名勝が散らばる江南の地であって、始寧はその中心に位置していると見ることもできよう。

さて天台山については「遠東」にある。賦の本文では、前半の四句でこのエリアにある山々や場所の名前が列挙される。「天台・桐柏」に始まり、「五輿・三菁」まで八つの名前が挙げられているが、山の固有名詞として確認できるのは、天台・桐柏・太平・四明の四つで、他の四つは不詳。また二韭・三菁・四明・五輿はいずれも数字を冠したものであるが、他のエリアにはこうした例はない。四明こそ実在の山であるが、その他は連想から命名された架空の地名かもしれない。

後半の四句では、遠東にある名勝についての解説が施されるが、具体的な記事があるのは七句目と八句目で、そこでは、苔むした石橋を渡ることと檣溪という川を渡ることが述べられている。この石橋と檣溪は、孫綽の「遊天台山賦」にも見えるもので、天台山にあるものについて述べていることは間違いない。このエリアには他に六つの地名が上げられているのだが、¹⁴それらは石橋や檣溪とは関わりがないものである。また自注に於いて、天台桐柏については「七県の余地」であるとす。他の資料では「五県の余地」とするものが多いが（当該部分語注）、いずれにせよ天台山に関連してよく知ら

れた情報である。このことから、謝靈運が遠東を代表する山として天台山を捉えており、賦に天台山に関する記述を載せることで読み手にその地域全体の様相を伝えられると考えていたのではないかと思われる。

しかし賦や自注に記されている天台山の記事は、実は先行する「遊天台山賦並序」を出るものはない。第七章から第十四章に述べられているたぐさんの名勝とそれに関する記事は、他の文献には見えないものが多く、謝靈運によってのみ残されている情報もある。しかし天台山について言えば、真新しい知見や実地に踏破しての感慨に基づく記事がこの賦に見られるわけではない。謝靈運の天台山に関する知識は、孫綽や魏晋期の一般的なそれと、さほど違わなかったのではないかと推測される。

即ち、謝靈運にとって天台山は遠東にある山々を代表するものと認識されていた。しかし、天台山に関する知識で言えば、孫綽の賦などの既存の文献に記されているもの以上のものはなく、謝靈運独自の知見はなかったと思われる。彼の天台山に対する関心は、それほど高いものではなかったのではなからうか。

五 六朝以前の天台山に関わる詩歌

これまで六朝以前の天台山に関わると思われる詩歌を、十八点検討してきた。その内容をまとめておく

先ず先秦のものとしてされている①「茅初成昇天謠」は晋代あるいは唐代の仮託であり、三国葛玄の作とされる④「登天台」も後世の仮託であると考えられる。

「天台前集」に収録されているものの内、②「和紫微右英夫人」(「真誥」所収)・③曹植「遊仙詩」・⑥謝靈運「登臨海嶠初發疆中作與從弟惠連可見羊何共和之」(注臨海郡名疆中地名嶠山頂也)・⑦同「遊赤石進航海」(靈運游名山志曰、永寧安固二縣中路東南便是赤石)・⑧同「登永寧江望海」・⑫梁簡文帝「餞臨海太守劉孝儀蜀太守劉孝勝」・⑭庾信「道士步虛詞」・⑮劉斌「詠山」・⑯李巨仁「登台山篇」は、いずれも天台山とはほとんど関わりがない。仙山を描いているものだが、必ずしも天台山に特化したものではない。

許尚枢は、王子喬(晋) 讚として、⑤陸機・⑨謝靈運・⑩江淹のものをあげ、桐柏真人(即ち王子晋) に関わるものとして⑪梁武帝「桐柏曲」をあげている。王子晋は確かに天台山に関わりがあるが、これらの讚や曲では天台山への言及は見られない。

⑬呉均「別王謙」においては隱者の隱遁先として天台の名があげられているが、詳しい具体的な描写は全くなされていない。⑱謝靈運「山居賦」は、隱棲の地である始寧からやや遠い場所にある名勝の地として天台・桐柏が記されていた。しかしここでも具体的な描写や情報は、⑰孫綽「遊天台山賦並序」を出るものではなかった。

こう見てくると、天台山は孫綽の賦を除けば、詩歌で詠われることはほとんどなかったことが分かる。六朝期以前にあつては、天台山の知名度や山岳としての人気はこの程度であつたと言わざるを得ない。確かに散文においては、晋代の葛洪の「抱朴之」にその名が見え、支遁に「天台山銘序」があつたらしく(『文選』李善注所引)、天台山という山の名は知られていた。しかし具体的な記事となると乏しく、人々の興味関心の対象とはなっていないことが考えられる。

そうした中で、ほとんど唯一詳しいものとなっているのが孫綽の「遊天台山賦」である。ここではまさに天台山という山岳が記述の対象とされている。しかしこの賦は、孫綽が実際にそこを訪れて作ったものではなく、「天台山の図」を眺めて、山川遊行を想像しながら作ったものであった。その点で極めて観念的な遊行であり、天台山自身も仙界のイメージと重ね合わせて捉えられている。

実際の登攀の対象としての、またそこを訪れての文学活動の対象としての天台山の姿は、六朝期にはまだ見られず、抽象的観念的なものの域を出てはいなかった。¹⁵⁾ そのころの人々にとって天台山は遠い存在であり、神仙的な雰囲気に含まれた模糊としたものだったのである。文人達が天台山を訪れ、滞在して詩文等の記述の対象とするようになるのは、唐代になってからである。それは、天台山の宗教者による開発が盛んになるのが、隋末の天台大師以降であるのと軌を一にしているようである。

〔注〕

(1) 本稿に先行するものは次の二点。

○「天台山の詩歌(其一)」(六朝以前(上))、『埼玉大学紀要教育学部』第五八巻第一号、二〇〇九)；「天台前集」の序文と、六朝以前の詩を三点を検討した。

○「同(其二)」(六朝以前(中))、『埼玉大学紀要教育学部』第五八巻第二号、二〇〇九)；六朝以前の詩を十三点検討した。

(2) 孫綽の生卒年については異説がある。ここでは長谷川説で示した。

(3) 徐靈府撰「天台山記」との関係で言えば、序文に関わるものとしては「涉海則有方丈蓬萊、登陸則有四明天台(海を渡ると方丈山や蓬萊

山があり、陸地に登れば四明山や天台山がある)」の二句が「天台山記」

(二丁表；国立国会図書館本の丁数。以下同じ)にそのまま引かれており、また同(三丁裏)には「南馳縉雲、北接四明(南は縉雲山に馳せ通じ、北は四明山に接している)」とある。また類似する表現として「靈仙之所窟宅(靈妙な仙人たちが洞穴住まいをしたところ)」が「天台山記」(十二丁裏)に瓊台を描いて「非神仙之窟宅、曷能若斯(神仙が洞窟住まいをするところでなければ、どうしてこのようにすばらしいことがあるるか)」とあり、「不列於五嶽(天台山が五岳に名を列せず)」(倒景於重溟(その姿を深い海に逆さまに映し))が、「天台山記」(四丁表)に「至於巖煙匿景、匪徒與五岳爭雄(巖に立ち上る霧にその姿を隠しており、地上の五岳とその雄大さを競うだけではなく、天上の山々にも匹敵するものである)」とある。「魑魅」について、李善注が杜預「左氏伝注(宣公三年条)」の「魑、山神。魅、怪物」を引くように、従来は山林に棲む怪物妖怪の類と解するが、遠藤は、仏教の三惡道、とりわけ地獄をここに詠み込んでいると解している。

(4) 「天台山記」との関係で言えば、「蔭牛宿以曜峯(牛宿に照らされてその峰を輝かせる)」が「天台山記」(二丁表)に「當牛斗之分、以其上應台宿光輔紫宸、故名天台(牛斗の分野に当たり、天上において台宿が紫宸を光輔するのに対応している)」とあるのに通じている。また「赤城霞起而建標、瀑布飛流以界道」の二句が、前者は「天台山記」(十三丁表)に、後者は「同」(四丁裏)にそのまま引用されている。また後述する謝靈運の「山居賦」でも「赤城」と「瀑布」を天台山を代表する形象としている。

(5) 「天台山記」との関係で言えば、後述注(5)の「檜溪」、(6)の「五嶽」、(7)の「石橋」が「天台山記」にも見える他、「搏壁立之翠屏

（壁のようにそそり立つ翠の岸壁にしがみつく）」が「天台山記」（四丁裏）に引用されている。なお「天台山記」では、「西北翠屏巖（その西北には翠屏巖あり）」という句に続けてこの部分を引用しており、「翠屏」を固有名詞として認識しているように見える。孫綽の賦においては、「翠屏」は「滑石」と対の語となっており、この点からは一般名詞として用いられているように見える。

（6）天台山には檜溪という名の溪流が知られる。後述する謝靈運の「山居賦」にも「凌石橋之莓苔、越檜谿之紆紜」とあり、自注に「往來要徑石橋、過檜谿」とある。また徐靈府撰「天台山記」（二丁裏）に、顧愷之「啓蒙記」を引いて「路經瀑布、次經檜溪、至于浙山。檜溪在唐興縣東二十里（経路は先ず瀑布をへ、次に檜溪を経由し、浙山に至る。檜溪は唐興県の東二十里の地にある）」とある。既に魏晉朝期には檜溪は固有名詞として知られていたものと思われる。またこの賦では「檜溪」は「五県」と対の語として使用されている。佐竹はここを「ナラの生える谷川」と訳し、一般名詞として扱っているが、本稿では固有名詞と見る。

（7）『文選』李善注引孔靈符「会稽記」に「天台山舊居五縣之餘地」、「天台山記」（二丁表）に「大小台處五縣中央（大小台は五縣の中央に位置する）」など。

（8）例えば、晋の竺曇猷が天台山に入り、古老が「横石が塞いでいてしかも苔むしていてそこを渡ることはできない」と伝承してきた石橋を渡ろうとした。山の神は一旦はそれを阻んだが、遂に曇猷に自分の居所を明け渡したところ、横石が開き橋を渡ることが可能になった。しかし橋の途中にいた神僧に「十年後に改めて来るよう」に言われて、曇猷は結局は渡らずに帰った（『梁高僧伝』卷一一）。この説話から、この石橋を渡ることは、ある種の特権体験であり、渡ることができたものは、よ

り一段高いところへ上がり、天台山の「主」となることを示していると思われる。

（9）「天台山記」との関係で言えば、賦の「藉萋萋之纖草、蔭落落之長松（綺麗な細草の上に腰をおろしたり、高く伸びた松の木陰で一休みする）」が「天台山記」（六丁表）に引用され、「過靈溪而一濯、疏煩慮於心胸（靈溪を過ぎて沐浴し、胸の中から煩惱を流し去る）」が、「天台山記」（五丁表）に引用されている。また「觀翔鸞之裔裔、聽鳴鳳之嚙嚙（鸞鳥が羽をなびかせて飛ぶのを眺め、鳳凰の穏やかな鳴き声に耳を傾ける）」に見える鸞鳥と鳳凰は、「天台山記」（三丁裏）に「鳳翔、神鸞棲於其上（鳳凰が飛翔し、美しい狐や彪が山中に生息する）」とある。

（10）靈溪は固有名詞なのか、あるいは「靈妙な溪流」という一般名詞であるのか。「天台山記」では、天台觀という道觀に至近の瀑布の水が靈溪に注ぎ、やがて県大溪に合流するというが、『嘉定』赤城志』卷二四にも「靈溪、在縣西北一十五里、福聖觀前」とある。福聖觀とは天台觀の後代の名称なので両資料が指す靈溪は同じものと考えてよからう。また同書は、天台觀の西に瀑布寺があり、その瀑布寺の北に百丈巖があつて、その巖の下を靈溪が流れているという。そのすぐ後に「過靈溪而一濯」の句を引いていることから、孫綽の賦に言う靈溪も固有名詞だと捉えていたことは間違いない。しかし孫綽のいう「靈溪」が固有名詞であるか、一般名詞であるかは必ずしも判断としない。

（11）「雙闕」と「瓊臺」は固有名詞なのか一般名詞であるのか。「天台山記」（十一丁裏）では、「即平視瓊臺、而下望雙闕（瓊臺を水平に眺め、双闕を下に見下ろす）」などとあり、これらを天台山中の具体的な場所の名（固有名詞）としている。日本の釈成尋「參天台五臺山記」（卷一）に引く唐元孚「天台山石橋銘並序」では「元孚、元和末間、游石橋・華頂・

□(白?) 砂・靈□(窟?)・雙闕・瓊臺、無不至」とあり、『嘉定』赤城志』卷二に「瓊臺雙闕、兩山自崇道觀西北行二里…(略)…孫綽賦所謂、雙闕雲竦以夾路、瓊臺中天而危居、是也」とあるのも同様である。赤城志では孫綽の賦でも固有名詞としてしていると捉えている。しかし、『文選』李善注引く顧愷之「啓蒙記注」では「天台山、列雙闕於青霄中、上有瓊樓瑤林醴泉仙物畢具」とある。ここでは雙闕や瓊台(瓊樓も同じ意味だろう)は「瑤林醴泉仙物畢具」といった言葉と並列されており、一般名詞であるとされているように見える。魏晋朝の段階で、これらが固有名詞化されていたという証拠は乏しいと言えよう。

(12) 例えば「天台山記」においては、徐霊府自身の山中の拠点は「方瀛山居」と命名されていた。

(13) すべての論文が参考になったが、齋藤論文は謝霊運の詩賦をトポロジカルな観点から論じていて、本稿の訳注作り以外においても興味深いものがあった。

(14) 桐柏山は天台山と一体視すべきなので、天台山と異なるものは六点である。

(15) 六朝時代までにその山を訪ねたり滞在したりして作られた詩文が無かったわけではない。例えば廬山については慧遠らによる詩文が数多くものされていた。拙稿「廬山慧遠と文学」(『九州中国学会報』第四五号、二〇〇七)等。

(二〇一〇年三月三十一日提出)

(二〇一〇年四月一六日受理)